

自分らしさを発揮し、生き生きと生活する幼児の育成

～共に育ち合う姿をめざして～

I 主題設定にあたって

【本園の実態】

(1) 地域・家庭の実態

- ・本園は、大田町の中心を流れる三瓶川沿いに位置し、大田保育園、大田小学校、大田高校と隣接している。近くには三瓶山や海、川もあり自然に恵まれている。また、大型遊具のある公園や代官山動物公園、整備されたお寺などもあり、体を十分に動かしたりかしたり自然に触れて安心して遊んだりできる環境がある。園外保育に取り入れている。
- ・園全体の90%が核家族だが、祖父母が近くに住居を構えている家庭が多い。また、大田町外から通園している子どももおり、幼稚園教育への期待を寄せられている。
- ・保護者は園の行事やPTA活動等に協力的である。中には、子どもへのかかわり方について悩んだり戸惑ったりする様子が見られ、日々の送迎時や懇談会等で担任や園に相談する保護者も多い。降園後は公園や図書館などで時間を過ごす家庭がある一方で、スマートフォンや電子ゲーム等のメディアに触れる時間が増え、生活体験や自然体験が不足している傾向がみられる。

(2) 園・幼児の実態

- ・本園は、3歳児7名（満3歳児4名も含む）、4歳児4名、5歳児8名計19名の小規模園であり、今年度は、3、4歳児は混合クラスである。大田市独自の施策で3歳の誕生日を迎えた満3歳児の入園が可能であり、年度途中で園児数の変動がある。近年は、少子化や保護者の就労により、園児数の減少傾向が続いている。
- ・園児は、全体的に明るく、素直で、保育者や友達と触れ合ったり、かかわったりして一緒に過ごすことを楽しむ姿が見られる。また、困っている友達に自分から優しく声をかけたり、面倒をみようとしたりするなど友達のことをよく見ていて気が付く面も見られる。一方で、自分の思いを表現することができにくかったり、自己主張が強く、感情をうまくコントロールできないことから我慢ができなかったり、友達に自分の思いを押し付けようとしたりするなどの姿も見られる。

II 主題設定の理由

近年、新型コロナウイルス感染症の流行により、家庭で過ごす機会が多くなり、活動が制限されるなど生活スタイルが変化した。また、IT化の進展により、メディアにかかる時間が増加傾向にあり、幼児を取り巻く環境は、子ども達の成長に影響していると思われる。

本園の幼児の実態から、「自分の思いを表現することができにくい」、友達とのかかわりの中で「自分の思い通りに物事を進めようとする」ことなどが課題となっている。そのため、保育者との信頼関係を基盤にありのままの自分が受け入れられ、大切にされているという安心感をもち、自分の思いを素直に表現すること、自信をもって活動に取り組めるようになること、友達とのかかわりを通して自分や友達のよさに気づき、共に遊ぶ喜びや楽しさを味わうことなどが必要ではないか。そして、その経験を積み重ねていくことで、自分のことが好きになり、共に生活する友達のことを大切に思う気持ちが育つであろうと考えた。

そこで、一人一人の個性やよさ、育ちを丁寧に捉えながら、人とかかわる力や態度を育み、自分らしさを発揮して生き生きと生活できるように支え、互いのよさを認め合い共に育ち合う子どもの育成を目指したいと考え、本主題を設定した。

<自分らしさを発揮し、生き生きと生活するとは>

- ・自分のことが自分でできる。
- ・自分の思いを素直に表現する。
- ・自分で考えてやってみようとする。
- ・自信をもっていろいろなことに意欲的に取り組む。

<共に育ち合うとは>

- ・友達のよさに気づき、互いに認め合う。
- ・友達と協同して活動に取り組む。

Ⅲ研究の目標

自分らしさを発揮し、生き生きと生活する幼児を育て、共に育ち合えるようにするためには、どのような環境の構成や援助をしていけばよいか保育実践を通して明らかにしていく。

Ⅳ研究の内容と方法

研究の内容	○研究の方法 ・具体的な取り組み
自分らしさを発揮して生き生きと生活するための環境構成と援助を探る。	①ありのままの子どもを受け止め、安心して自分を出せるようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・一人一人と丁寧にかかわり、表情、しぐさ、言葉などから思いを探る。(記録の活用) ・全職員で一人一人の子どもについて話し合う機会をもち、多面的に捉え、子ども理解を深める。(子どもを語る会) ・一人一人のよさを活かす学級作りをする。(カード“きらきら♥みつけたよ”を活用して、一人一人のよさを紹介する機会をもつ)
共に育ちあうための環境構成と援助を探る。	②自信をもって生き生きと遊ぶために活動を充実させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・人、もの、ことに主体的にかかわり、「やってみたい」と遊びたくなるような環境を構成する。 ・子どもが経験していることを捉え(活動に取り組んでいる姿、育っている姿など)、さらに遊びが広がったり深まったりしていけるように援助する。
保護者との連携を図る。	③互いに思いを伝えながら友達と一緒に取り組む活動の工夫をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・異年齢がかかわり合えるような環境の見直しや場の設定をする。 ・友達に興味、関心をもち、一緒に遊びを楽しめる場を工夫する。 ④友達とのかかわりの中で、いろいろな思いや考えに触れ、友達のよさや違いに気づくことができるようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・お話タイムの内容(保育者の声掛け、進め方など)を工夫する。 ・トラブルや葛藤場面、困り感を感じている場面などを大切に、友達と一緒に乗り越えていけるように話し合いの場や内容を考える。 ⑤保護者への情報発信、情報交換を工夫する。 <ul style="list-style-type: none"> ・すくすく便り、クラス便りの内容等を見直したり、ドキュメンテーションを取り入れたりして子どもの姿などをわかりやすく伝える。 ・子どものよさをカード“きらきら♥みつけたよ”で伝え合い、園と家庭で共有し、子ども達の自己肯定感を高められるようにする。

V 研究計画

1年次	研究主題の立案 実践を通した子どもの実態把握 1年次のまとめと課題
2年次	研究構想の再検討 教育課程の見直し 保育実践の分析・考察 2年次のまとめと課題
3年次	保育実践の分析・考察 3年次のまとめと課題

VI 実践事例

VII 研究の成果と今後の課題

○自分らしさを発揮して生き生きと生活するについて

- ・一人一人が安心して自分を出せるように支え、しぐさ、表情、言葉など様々な面からありのままの姿を受け止めるようにしてきた。また、全職員で全園児について話し合う機会（子ども語る会）を設け、多面的に捉えるようにした。全職員で話し合うことで、子どもの育ちが見えてきたり、担任だけでは気付くことができない支援の仕方に気付いたりすることができた。話し合ったことをもとに子ども達を支えてきたことで、一人一人が安心して自分を出せるようになり、自分らしさを発揮する姿につながったように思う。
- ・子どもの興味、関心を探り、その上で子どもが「やってみたい」と心を動かして遊べるように支えていくことが大切だと考える。そのためにどのようにして“ひと、もの、こと”に出会わせるのかを考えたりしかけをしたりして環境を整えていくことが、遊びを支えていくために不可欠なことだと改めて感じた。また、遊んでいる子どもの姿から育ちを捉え、それに応じた援助をしていくことが、子どもがもっている力を引き出すことになり、自信をもたせることにつながっていくと思った。

○共に育ち合うためについて

- ・全園児活動の“わくわくタイム”を異年齢がかかわり合える場になるように活動内容を工夫し、一緒に楽しめるようにしてきた。他にも散歩に一緒に行くときには手をつないだり、一緒に給食を食べたりするなどかかわりが広がるような機会もつよようにしてきた。年下の子どもにとっては、年長児への憧れの気持ちや安心感をもって活動に取り組む姿や、年長児にとっては、年下の子どもに頼りにされ、優しくしたりするなどの姿が見られ、互いに温かい気持ちが育まれているように思う。
- ・自分の思いをしっかりと出したり伝え合ったりできるように“お話タイム”を工夫して取り組んできた。友達の思いを聞くことにより、自分とは違う思いや考えがあることに気付き受け入れるきっかけになったり、友達のよさを感じ互いを認め合える場になったりした。また、困ったことやトラブルなども取り上げ、みんなで話し合うことで、新たな解決策を思いつき、みんなで乗り越えていく経験にもつながった。

○家庭との連携について

- ・子ども達の遊びの様子をわかりやすく伝えるために、クラスだよりをドキュメンテーションにして配

布した。連絡帳の感想から、子ども達の様子が伝わっていることが感じられた。遊びからどんなことを学んでいるのか、保護者にわかりやすく伝えることの大切さを改めて感じる事ができた。

- ・子どもの素敵なところを保護者と共有するために“きらきら♥みつけたよ”の取り組みを行った。ハートのカードを親子参加の行事の度に保護者に書いてもらったところ、子ども達は、“どんなメッセージが書いてあるのかな”ととても楽しみにするようになり、喜ぶ姿が見られた。自分の素敵なところを言葉にして見える化したことが自信となり、自己肯定感につながっていると思う。今後も継続していきたい。

<今後の課題>

- ・子どもを語る会は、日々の生活や職員体制などの関係で、定期的に全職員で行うことができにくい時もあり、継続していくことの難しさを感じている。今後も、会の持ち方や内容など工夫しながら、全職員で一人一人をありのまま受け止め、子ども理解を深めていけるようにしていきたい。
- ・人権教育は、大人が子どもを大切にする実践である。大人のふるまいなど子ども達に与える影響は大きいと思う。今後も研修を重ねながら、一人一人を大切にする保育を実践していきたい。